青山国際政経論集 104 号，2020 年 5 月

研究ノート

シェイクスピア転機の実験劇
――『ペリクリーズ』雑感

狩　野　良　規*

『ペリクリーズ』は初演時から人気芝居だったらしい。戯曲まで異例の売れ行きを示している。だが，シェイクスピアの最初の全集「第一フォリオ版（First Folio）」（1623 年）には入っていない。それが物議を醸す。今日，シェイクスピアの「正典（カノン）」とされる 37 作品のうち，『ペリクリーズ』を除く 36 篇は，沙翁（シェイクスピア）の死後 7 年にして出版されたその一巻本の全集に収められている。シェイクスピアと同じ劇団で苦楽を共にしたヘミングとコンデルによって編纂された書物である。まさか単純なミスで『ペリクリーズ』を載せそこなったなんてことはないはずだ。

いちばん考えられるのは合作説，他人の筆が入り過ぎている，それで外した[1)]。しかし作品の人気は衰えず，王政復古後に出版された「第三フォリオ版」（1664 年）に初めて掲載された。

『ペリクリーズ』の時代設定は古代，舞台は東地中海沿岸の諸国である。開幕から中世の詩人ジョン・ガワー[2)]がコーラス役として登場し，事の発端を説明

*　青山学院大学国際政治経済学部教授

1）　他に，出版権が買い取れなかった，また入手したテキストの正確さに疑問があった，などの説がある。

2）　ジョン・ガワー（1330?–1408 年）はチョーサーと同時代のイギリスの詩人。『ペリクリーズ』の原話は古くからヨーロッパに広く知られていた「タイアのアポロニウス」，ギリシャから伝わったその物語をガワーが『恋人の告白』（初版 1393 年）の第 8 巻に収め，16 世紀にも 2 度出版された，それをシェイクスピアは参考にして劇作したらしい。沙翁は実在の中世詩人をコーラス役として各幕の冒頭に登場させ，物語の説明をさせているわけだ。

© Aoyama Gakuin University, Society of International Politics, Economics and Communication, 2020

する。ここはシリアの美しき都アンティオケ，その王アンタイオカスは自分の娘に心惹(ひ)かれ，ついに近親相姦におよぶ。だが，そうとは知らず姫に求婚する者が後を絶たない。そこで王は，わが謎を解け，解ければ王女を娶(めと)らせるが，解けない場合は命をもらう，と。かくして城壁には求婚者たちの髑髏(されこうべ)が並んだ。

芝居が始まると，ツロの領主ペリクリーズが現れ，へへエ，さっそく謎を解いてしまう。しかし，王と娘の爛(ただ)れた関係に気づき，急ぎツロに帰る。さらに，秘密を知られたアンタイオカスが攻め入ってくる危険を察知し，タルソへ逃げる。時あたかもタルソは大飢饉に苦しんでおり，ペリクリーズが自分の船に積んであった穀物を配って，太守クリーオンとその妻ダイオナイザに感謝される。

だが，ペリクリーズは刺客から逃れるため，ふたたび船を出し，海上で嵐に遭遇して難破，ペンタポリスの海岸に打ち上げられる。その国では馬上槍試合に出場して勝利を収め，王女セーザと結婚する。

ペリクリーズは身重になった妻とともに帰国を決意するが，船はまたもや嵐に遭い，産気づいたセーザは女の子を産み落として死んでしまう。悲しみに暮れるペリクリーズは妻の遺体を柩(ひつぎ)代わりの大きな箱に入れて，海に葬る。ところがなんと，エフェサスに流れ着いたセーザは名医の手によって息を吹き返す。あゝ，おとぎ話。タルソに戻ったペリクリーズの方は，海で生まれた赤ん坊をマリーナと名づけ，クリーオンとダイオナイザに預けて，ツロへ向かう。

と，ここまでが 3 幕。物語はタッタカタッタカ進む。「四大悲劇」のように内面の悪と戦うこともないから，ズシリと胃にもたれず，あっさりと，一気に読める[3)]。もの足りない?! そう，前半はシェイクスピアではなく，他人の筆にな

3） 僕が長年所属している大学学部は社会人に門戸を開いた大学院を持っている。そこの院生および修了生で文学にはまった人たちと，「えみゅーるの会」――えみゅーるは，トルコ語で “人生” ないし “人生の歓び” の意――を作って，月に 1 冊ずつシェイクスピア劇を読もうということになった。結局，2004 年春から 08 年秋の約 4 年半で 37 作を読破した。

『ペリクリーズ』を読んだ折のメモには，「紙芝居のようだ。シェイクスピアらしくない」，「スペクタクルで見せる部分もあり，蜷川向きじゃないか」，「勧善懲悪。人物が平板で類型的」，「どこかで生き返るなと，予測がついた」，「嵐の人生そのもの

るものじゃないかという説もある[4)]。いや，もともと昔話に内面心理の探求は希薄なのだ。桃太郎や浦島太郎，それからオリンポスの12神にも，我々は複雑な心理描写を求めない。深層心理なんてシャレたものも，フロイト以降の流行(はや)りである。

4幕。「時」の語り部ガワーが，あっという間に歳月が流れ，マリーナは年ごろの娘になった，と。彼女は教養あふれる，匂うがごとく美しい女性に成長していた。けれども，ダイオナイザは自分の一人娘がマリーナと比べられて影が薄くなっていると妬(ねた)み，部下にマリーナ殺害を命じる。ほほう，昔話にしても，すごい話だ。そして，あわや殺されるという場面で，彼女は海賊にさらわれ，ミティリーニの安女郎屋に売り飛ばされる。父親同様，娘にも艱難辛苦(かんなんしんく)が……

4幕では，幕の最初だけでなく途中でもガワーが顔を出して，タルソに娘を引き取りに来たペリクリーズが，マリーナの墓を見せられて失意のどん底に突き落とされたと語る。ペリクリーズは，今後顔を洗わず，髪も切らないと誓いをたてる。汚ったねえ，だいいち臭(くさ)いだろう。昔話の現実感(リアリティ)のなさ！

そのころ，マリーナは女郎屋で乙女の危機――と思いきや，客の男たちに有難いお説教を聞かせて，彼らを次々と改心させてしまう。「悪魔があの娘(こ)のキスを買いに来ても，清教徒にされてしまう」という始末。笑える話だ。僕はこの色気のない，小便臭いシーン――失礼――がけっこう好きだ。感化された客の中にはミティリーニの太守ライシマカスもいた。と，まあ，近代リアリズム演

を描こうとしたんだろう」，「人の心の変わりやすさ，裏切り。こんなもんですよ」，「科学に圧倒される前の時代の作品」などの感想が残っている。

職業も年齢も人生観もバラバラの面々，僕は常に“攻略本”より，まずは自分の目で作品を読んで，正直な感想を述べてほしい，「皆さんの生きてきた年輪や長年やってきた仕事に照らしてシェイクスピアと対話すれば，各人がそれぞれ異なる，味わい深い感想を語れるはずだ」と。

実際，そのとおりの豊かな批評に毎回出会えた読書会であった。参加者の皆様にあらためて感謝申し上げる。

4） 合作説がある作品の場合，面白くない場面やセリフは，これ共作者が書いたんだろう，と。文体を検討すれば，それはそれなりに説得力があるのだが，でもあまり安易に沙翁の筆ではないとするのも問題がある。また，役者はたいてい，自分のしゃべっているセリフは，「これは間違いなくシェイクスピアが書いた詩行だ」と主張するという話もある。

劇なら，こんな安女郎屋に太守は行かないだろうが。

でも，女郎屋の使用人ボールトがマリーナに客引きの仕事をなじられて，「じゃあ，戦争にでも行けって言うのかい，7年間戦場で働いて足1本なくし，それでも義足一つ買う金にもならないんだぜ」と食い下がる。これは一片のリアリズム。マリーナはライシマカスからもらった金をボールトに渡して，女郎屋を脱出する。

5幕は，海神ネプチューンの祭りの日。ボロをまとってみすぼらしい，たぶんホームレスのような身なりのペリクリーズは船で海上を漂っていたが，その船がたまたまミティリーニに停泊する。祭りに沸く町に，黒い弔旗を掲げて。

太守のライシマカスが訪れると，ペリクリーズは愛する娘と妻を亡くして，悲しみのあまりここ3カ月，誰とも口を利かずに引きこもっている，と。太守はマリーナの美しい歌声で，王の病んだ心を癒(いや)そうと考える。

マリーナが歌う。この芝居のクライマックス・シーンの始まりである。王は若い娘を拒否する。だが，マリーナは訥々(とつとつ)と自分の境遇，運命，悲しみと苦しみの数々を語りはじめる。ペリクリーズは彼女に目をやる。この娘は妻に似ている，娘も生きていればこれくらいの年ごろだろう。「私の名はマリーナ」，えっ，ペリクリーズが動揺する。「父はある国の王でした」，「海で生まれたので，マリーナと名づけられた」，さらに「母の名はセーザ」……死んだはずの娘が目の前にいる！ ペリクリーズの顔はもう涙でグショグショである。

このシーン，見ている方も泣ける。むろん達者な俳優が演じればの話だが。

歓喜の王はやがて眠りに落ち，女神ダイアナがエフェサスへ急ぎ行けと告げる夢を見る。そしてペリクリーズはエフェサスのダイアナの神殿で巫女になっていた妻セーザと再会し，めでたしめでたしの終幕となる。

と，他愛ない昔話なんだけど，あらすじだけたどれば出来過ぎなんだけど，でも悪くないんだなあ。「一族再会」の物語，シェイクスピアはすでに最初期の『間違いの喜劇』から綴っている。おっと，あの芝居の舞台もエフェサスだった。また，コーラスの登場も『ヘンリー五世』でおなじみである。道具立てにさほど新しいものはないのだ。

でも，違う。タッチが異なる。『トロイラスとクレシダ』，『終わりよければすべてよし』，『尺には尺を』といった，いわゆる「問題劇」の時期には，こんがらがった物語を終幕で上手に解(ほど)いてみせればみせるほど，詩人のハッピーエンドに対する苦い逡巡(しゅんじゅん)がにじんでいた。けれども，『ペリクリーズ』では，父と娘，夫と妻の再会を作者が心底納得し，楽しんでいるような筆致(タッチ)である。

もちろん浮世の酸(す)いも甘いもたっぷり味わったであろうシェイクスピアが，人生すべからくめでたしめでたしに収まると思っていたはずはない。しかし，人の世がそうあってほしいと祈る気持ちにはなったのではないか。だからこその，圧巻の再会シーン。やはりクライマックス・シーンをもっている作品は強い！

どこまでがシェイクスピアの筆か判然としない芝居である。だが少なくとも，全篇彼のチェックは入っていたはずだ。沙翁はまだ不完全な実験作の大ヒットに，これで行ける，この路線で書こうと自信をもったのだろう。シェイクスピアはその後，『シンベリン』，『冬物語』，『テンペスト』と，彼の晩年の心境を反映させた寓意劇を執筆する。

後世の人々はそれらの悲喜劇を「ロマンス劇」と呼び慣わしている[5)]。

（2020 年 1 月 脱稿）

5） ロマンス劇は，19 世紀の批評家・英文学者エドワード・ダウデンの命名。なお，最近はシェイクスピアの正典に『エドワード三世』，『サー・トマス・モア』，『二人の貴公子』を加えて，全 40 篇とする研究者もいる。沙翁の筆が入っているであろう共作は，全部彼の劇として研究対象にしてもいいのではないか，と。そのとおりなんだけど，でも正直のところ，その 3 篇はさほど面白い芝居とはいえない。僕は『ペリクリーズ』を含めた 37 篇だけで十分と考えている。